



水戸市南町

NPO法人東日本大震災応援隊 サロン被災地支援村

水戸徳川家のゆかりの地として、そして茨城県の県庁所在地として長い歴史と伝統を持つ水戸市。その中心部である南町、水戸駅前からの国道50号線沿いにあるのが、今回ご紹介する NPO法人東日本大震災応援隊の皆さんが運営するサロン「被災地支援村」です。活動の中心は、被災地で直接被害、または風評被害にあっている生産者や食品加工会社の商品の仕入れと販売を通じた被災者支援。小さなスペースながら店内には、宮城、岩手、福島、茨城、各地のさまざまな特産品が所狭しと並びます。

「最初は被災地に支援物資を運ぶ団体として発足したんです」と代表理事の府川守さん。「震災の様子を見て自分も何かしなくては、と考えたんです。震災から1ヵ月後の4月11日には募金で集まったお金を茨城県に、続いて福島県に寄付をすることができました。その後、長く続く支援をしていきたいと考えて、2011年6月下旬に今の店をオープンさせました」。商品は府川さんが市場などで見つけ製造元に問い合わせたり、直接現地の工場やお店を訪ねるなどをして仕入れています。「震災の直接被害だけでも大変なのに放射能による風評被害。放射能検査をパスして安全だと分かっても、実際には福島産、茨城産というだけで避けられてしまいます。大きな工場やメーカーさんは何とかやっていますけど、中小の企業は泣



代表理事の府川守さん

いていますよ。でも、そんな中小の企業にこそ、本当にいいものを作って頑張っているところが沢山ある。そんな企業の商品を中心に仕入れているんです」。例えば、会津でなめこの生産一筋で頑張ってきたおじいちゃんがつくった、なめこの缶詰。一筋できたからこそ風評被害で商品が売れなくなっても、ひたすら作るしか道はありません。他にも、海



辺の工場が被害を受けた小さな会社で作る無添加で健康に配慮した美味しいかまぼこ。被害が大きかった陸前高田市産のりんごを使ったりんごジュースなど。「注文の返信 FAXに“助かります”とメモをされる方もいます」と府川さん。店内のどの商品にも、それに関わる沢山の人の想いが託されているのです。

「お店には、避難している被災者の方や、お身内が被災され亡くなられた方などもいらっしゃいます」とはスタッフの吉村智与子さん。「お店にいらした方に、夏はりんごジュース、冬はお汁粉をお出ししているんです。甘いものを食べながらお喋りしているとホッとされるのでしょうか、ご自身の辛い体験を話される方もいます。私達は聞くことだけしかできませんが、その方の気持ちに寄り添っていく姿勢は大切にしています」。懐かしい郷土の特産品を見つけて、嬉しそうに購入される方もいるそう。「被災された方、そして被災地を応援したい方、みなさんのお役に立てればと思っています」。

今後の目標は、お店の売り上げを採算ベースにのせることと、寄付金の額を増やすことだそう。「そのために街のイベントなどでお店のPRをするようになりました。また、企業やお店から商品の寄付を募り、その商品を売っています。仕入れのお金がかからないので、その売り上げは全額寄付金にまわせますから」と府川さん。「今、募金活動をしてても震災直後より集まりが悪いし関心も薄くなっています。でも、現地はまだまだ助けも現金も必要な状況です。だから私達もできるだけ長く続けられるように、頑張っていきたいと思います」。被災地の復興はこれからが本番で、私達ができることはまだまだある。そんな気持ちが感じられる活動でした。



いばらきの社会福祉

Social Welfare of Ibaraki

発行者／社会福祉法人

茨城県社会福祉協議会

〒310-0586 水戸市千波町1918

TEL.029(241)1133(代) FAX.029(241)1434

<http://www.ibaraki-welfare.or.jp/>

E-mail ibashakyo@ibaraki-welfare.or.jp



携帯電話で読み取るだけで簡単に「茨城県社協HP」にアクセスできます



環境に配慮して再生紙と大豆油インキを使用しています